# アジアの茶畑から
## 『中国福建省　美味しいお茶が無くなっていく』

須賀　努

五月初旬、福建省安溪へ行った。安溪は厦門から車で一時間半ほど内陸に入った山間地で中国の銘茶、鉄観音茶の主産地として知られている。筆者が愛飲している鉄観音は香港で購入しているが、昨年初めて香港の茶荘オーナーの実家がある村を訪ね、美味しいお茶がどのように作られているのか見に行った。そのあまりに素晴らしい環境に目を見張り、何と今年も訪ねた。

そこでは実に健康的な生活が送られている。周囲は全て茶畑に囲まれ、空気は気持ちよいほどに澄み、そこの水で淹れた茶は何とも言えない極上の味がする。茶農家では朝、鳥のさえずりで目覚め、食事は裏の畑で自ら植えた完全有機の野菜と粥など、胃にやさしい食べ物ばかり。ネットも繋がらず夜は早く寝るしかない。都会生活に疲れた体には至福の時間を過ごすことが出来るのである。

### 美味しい鉄観音茶が無くなったわけ

実は最近、鉄観音茶が美味しくなくなったと思うことが多い。その理由はこの村に来て直ぐに理解できた。昔ながらの製法で作っている人が殆どいないのだ。製茶された茶葉を見れば緑茶に近い鮮やかな緑が目立ち、一煎目の香りはそれなりに立つが、それで終わり。中には飲んだ後、胃もたれを起こすものまである。専門家によればそれは発酵が足りていないなど「手抜き製造」によってできた粗悪茶だという。そんなお茶が作られる原因は簡単で「てっとり早く儲ける」ためだ。今の中国を象徴している一つの例だと言える。

伝統的な製法は実に手の込んだ作業であり、茶摘み後二日間ほぼ寝ずに製茶に励む。勿論人間の手による作業には限界があり、生産量は極めて少ないが、それだけに名人が作るお茶には独特の味わいがある（写真1）。だが現代的な儲け主義の観点から言えば、生産量を増やすためには、出来るだけ機械化、効率化したい。その結果、三回やるべき作業を一回にし、本来じっくりやるべき乾燥作業をクーラーで行ってしまう。結果として見た目は良いが、濃厚な味わいを失う。品質が落ちると価格が下落、収入を補うためには生産量を増やし、益々品質が落ちるという悪循環が発生する。勿論茶葉の生育を早めたければ化学肥料を大量に使い、害虫駆除に農薬を多用することにもなる。

筆者が訪ねた六十五歳の張さんは「村で最後の伝統製法守護者」であり、その生涯は厳しい製茶の連続だったが、質の高い満足の行く茶を作り続けてきた（写真2）。茶摘みは全て手摘みで、肥料の使用は最小限に留める。実際の製茶作業を朝から晩までつぶさに見ていたが、それは緊張の連続であり、油断すると茶の味が落ちてしまう。今回筆者が見学を許されたその条件は『決して話し掛けないこと』だった。作業自体もかなりの体力を必要としており、張さん自身も『もうしんどい。今年で引退したい』と何度も叫ぶほど。

天候によっても茶の出来が大きく左右される。雨なら茶摘みは行わず、また伝統的には立夏を過ぎた茶葉は使わないという。これでは生産量をあげろと言っても難しい。張さんの茶を買いたい茶商は大勢いるが、商売の単位になるほどの生産量がないため、皆手が出ない。それでも出来立ての茶を味わう張さんの横顔に満足感がにじみ出る。完全に伝統工芸品の世界を見ているようだ。

だがそのしんどい姿を見てきた息子は残念ながら伝統的な手作りを辞め、機械製法に切り替えてしまった。簡単に生産量を増やして初めは順調だったようだが、品質の

問題から売れ行きが落ち、徐々に収入を減らしていく。嫁は茶業に見切りをつけ、家を出て泉州へ出稼ぎに行ってしまっていた。その息子は茶業へのいら立ちと母を失った寂しさからか、喧嘩ばかりの日々を送っていたが、やはり今年は村を出て出稼ぎに行ってしまったという。鉄観音茶の凋落と同時に農村家庭が崩壊していく様が見え、実に寂しい思いをした。

張さんが作る価値のあるお茶の単価はもっと上がらないのだろうか。この辺りにマーケッティング力、広告宣伝などの不足が見られるが、豊富な資本を武器に販売を伸ばす現代中国の企業には、『伝統的な真の価値』を伝える意思は残念ながらあまり感じられない。これは茶の世界ののみならず、現代中国で貴重な資産が失われている実態を見る上で重要だと思われる。

## 出稼ぎに行く村人たち

ある村人曰く「この村で労働年齢に達している者の内、普通話（標準語）が出来る者の殆どが出稼ぎに行ってしまった」と。今の若者は学校教育やテレビの影響で殆どが普通話を話せるので、この話は若者の殆どが村に居ないということを示している。そして今の四〇―五〇代で一部普通話が苦手な者が農作業の担い手となっている。

勿論以前より出稼ぎに行く若者はそれなりにいたのだが、上海や広東省など遠くへ出ていくので、その数は限られていた。ところが近年厦門や泉州など近隣都市や安溪近くにも工場が立ち、おまけに月額手取りで二〇〇〇―三〇〇〇元も貰えるとなると、茶業など季節労働的な不安定な仕事は敬遠され、村人は皆、工場へ通うようになる。「これも中央政府が示した所得倍増計画のお蔭さ」とある村人は自嘲気味に話す。その意味は「自分達の村などに対して地方政府は何もやってくれない。「鉄観音」という全国ブランドを持ちながら、彼らはこれも生かそうともせずに私腹を肥やしているだけ」と手厳しい。

最近どこの地方政府も自省の特産品を発掘して売り込むことに躍起になっているが、それにはそれ相当の利権がからんでいる場合が多い。ここ福建省では岩茶、紅茶、白茶など有名な茶が多過ぎて、どれか一つを集中的に売り込むことはしていない。そしてブランド品よりも新規開発した茶を優先的に補助することで、新たな利権が生まれているのかもしれない。

雨上がりの午後、本来朝しか摘まない茶摘みをする機械音が村に響き渡った。その音は実に空しく聞こえ、まるで鉄観音の茶畑を破壊しているようだった。この村だけではなく、今後の中国茶業の行方が心配である。いや茶業だけの問題ではなく、中国の農業、そして中国そのものが心配になる現在の農村風景なのである。

（すが　つとむ・コラムニスト〈アジアンウオチャー〉）

写真2　素晴らしい環境の中でお茶を作る張さん

写真1　今や手摘みの茶葉は極めて少ない